『登岳陽楼』杜甫

洞庭湖の湖面を吹く風は冷たかった

登岳陽楼　杜甫　　岳陽楼に登る　杜甫

昔聞洞庭水　昔聞く洞庭の水
今上岳陽楼　今上る岳陽楼
呉楚東南坼　呉楚東南に坼け
乾坤日夜浮　乾坤日夜浮かぶ
親朋無一字　親朋一字無く
老病有孤舟　老病孤舟有り
戎馬関山北　戎馬関山の北
憑軒涕泗流　軒に憑って涕泗流る

【語句の意味】

岳陽楼　湖南省洞庭湖東北岸の町岳州にある唐の開元4年（716）に建てられた文人墨客の詩文が多く飾られている

呉　楚　春秋時代の呉と楚　呉は今の江蘇省のうち長江以南の地　楚は今の湖南・湖北省の地

坼　二つにひきさく

乾　坤　天と地

無一字　一通の手紙も届かない

戎　馬　「戎」は武器の総称　兵馬　転じて戦争

関　山　関所のある山　国境にある山

涕　泗　「涕」一般の涙　「泗」は鼻水

【詩の意味】

昔から洞庭湖の壮観は話に聞いていたが、今初めて岳陽楼に登って見渡すことになった。

呉・楚の地は国土の東南部でこの湖によって東南に引きさかれ、果てしなく広がる水の面には天地が日夜浮動している。

さて、今の私には親戚朋友からは一通の便りもなく、老病の我が身には一そうの小舟があるだけである。

思えば、今なお戦乱が関所のある山の北の故郷ではつづいている。それを思いつつ手すりに寄りかかっていると涙と鼻水が流れ落ちるばかりである。

【備　考】

この詩は768年夔（き）州（現在の奉節県）を去り、最後の放浪の旅に出た杜甫が、弟の観に会うため三峡を下って江陵に至り、さらに洞庭湖の岳陽にたどりつき、この楼に遊んだ時の詩である。作者57歳。洞庭湖を詠う詩は多いが古来、孟浩

然の「洞庭に臨む」（気蒸雲夢沢　波憾岳陽楼）（「悠久の名詩Ⅱ55頁」参照）とこの詩が洞庭湖の二大律詩として千古の絶唱と称せられている。

【出　典】「唐詩選」「唐詩三百首」

【鑑　賞】

―杜甫の詩はどうしてこんなに悲しいのか―

首・顎・頸聯が対句になっている。洞庭湖は中国第一の湖。この詩の季節は冬だろうか、夏だろうか。前半は眺望の壮大さ、後半は例によって人生をふり返り、孤独と望郷の念に加えて、不安定な国運に思いをはせている。全体に憂愁に満ちている詩である。「春望」といい「登高」といい杜甫の詩はどうしてこんなに悲しいのだろうか。それは病身・老齢の身に加え、彼の旅は食料の糧を求めて友人を訪ねる漂泊の旅だからである。このあたりの事情を高木正一著「杜甫」＝中公新書を拾い読みして紹介する。

「彼の生活はとかく不如意がちであった。岳州に来る前、家族を当陽の弟に預けていたころ、子供たちからの手紙に『なぜ毎日豆雑炊ばかりなのか』と嘆かれている。そこで杜甫は杖をついて農家に米を借りに行くのだが、門が高くて入れない。自分でもみじめと思い、また家族とともに岳州に向かう。その時知人にあてた詩の中に自分は棄物同然の境遇であり安住の地は得られないと嘆いている。」

高木氏も同著の中で杜甫の生活を「悲愴暗澹たる孤独感」と評している。

【解　説】

○首聯

岳陽楼は語句の意味に示した通りだが、詳説すれば、岳州の町の西門にあたり、湖水から30㍍ほどの丘陵地に建てられている。高さは約15㍍で三層から成り、屋根は鳥が羽を広げたような姿で美しい。楼内は古代の文物と歴代名家の詩碑が多い。楼の塀に有名な「岳陽楼記」（宋の范仲淹の作）が刻されていて、中でも「天下の憂いに先んじて憂い、天下の楽しみに遅れて楽しむ」の名言もある。中国第一の広大な洞庭湖の眺望は絶景である。黄鶴楼・滕王閣とともに中国三大名楼とされている。

年表を見るとこの湖に臨んだのは57歳の冬とあるから夏ほど水は豊でなかったであろうが、初めて観る杜甫にとっては海のように思えたのだろう。

○頸聯

呉楚は春秋時代に中国南部を越とともに支配した国名だが、詩語をそのまま読むと湖を境にして呉と楚が二つに分断されているようにも取れるが、そうではない。春秋時代の地図を見ても洞庭湖はすっぽり楚の国の中に入っているから、

二国分断説は地理的に説明がつかない。従ってここは次の「乾坤」が二字で一つの意味を表わすように呉楚を二つの国と考えず、中国南部地帯の総称と拡大解釈して読解していくのがよい。つまり、湖によって国土が二分されているぐらいの解釈で良いと説明しているのは、岩波書店の「中国詩人選集」の黒川洋一氏の説である。

○頸聯

晩年の杜甫を形容すれば「悲壮」でなくて「悲愴」といえよう。食料も十分にない貧しい生活、年老いていく体、友人知人との別離、孤独、叶わぬ望郷の思い、安禄山の乱後の長安の紛争への憂欝、そして息も絶え絶えになっていた病身。これらが悲愴感を漂わせている。よく生きながらえたとさえ思う。四人の子供のうち一人を飢え死にさせているという本もある。

彼の有名な律詩を改めて見ると「春望」の六句目「家書万金に抵たる」、「登高」の六句目「百年多病独り台に登る」、「秋興」の六句目「孤舟一たび繫ぐ故園の心」さらに本会では採用がないが「旅夜書懐」の六句目「官まさに老病休むべし」（「悠久の名詩Ⅰ30頁」参照）などがある。詩の後半に悲愴感が抑えられないのである。

○尾聯

関山の北とは彼の生まれ故郷ではなく、壮年時代を過ごした長安を指すだろう。そして戦争の情報がわずかながら伝わったのか戦乱の世を嘆いている。安禄山の乱により長安を追われたものだから憎みも残っていたろうが、それは45歳ころの事件で、57歳のこの詩の時は、都には異民族の侵入が絶えず、各地で内乱も起こっていたという情報も耳に入ったのだろう、それら国運の衰えも胸を苦しめるのである。

また「涕泗流る」が切ない。「春望」には「花にも涙を濺ぎ」とある。鼻水は涙以上に耐えきれないつらさの表れだ。この微妙な表現も逃さず味わいたい。

この詩の二年後についに帰らぬ人となったことを思えば、洞庭湖を吹く風もきっと冷たかったろう。

【参考】 杜甫晩年の年表

七六〇　49　友人厳武の推薦で検校工部員外郎の官を得る。

七六五　54　厳武が死去したので4年間暮らした成都を去って長江を下る

七六六　55　三月、夔州に到る。

七六七　56　夔州城内を転々とする。

七六八　57　三月、江陵に到る。年末岳州（湖南省）に到り、洞庭湖に臨む。

七六九　58　湘江をさまよい暮らす。

七七〇　59　長安に帰らんとし、潭州・岳州の間の舟中で客死する。